

Caesar's Revenge

—その紹介とシーザーの亡霊—

高橋 昭 三

I はじめに

聖書に「さらば、カイザルの物はカイザルに」‘Render therefore unto Caesar the things which are Caesar’s’（マタイ伝22章 15～20節，マルコ伝12章13～17節，ルカ伝20章19～26節）という記述がある。思想、宗教精神については別問題としてみても、この種の記述が聖書を始めとしかかなり多くみられる。Julius Caesar ジュリアス・シーザー、ある時は英雄の支柱的、象徴的存在として、また自由の圧制者、独裁者としてかかっている。歴史的事実人物として、一個の興味ある人物として、過去においてシーザーを主題としてとりあげた書物、劇は数多くある。エリザベス朝時代にも可成りの数にのぼる劇があったらしいが、Shakespeare の *Julius Caesar* ほど身近なものはない。最近、同時代の無名作家によるシーザーを主題にした *Caesar's Revenge* を読む機会を与えられた。シーザーの姿が、同時代の劇的伝統、作家の思想と才能そして劇的筆法によって異質なまでの相違を知ることができた。この稿では、極く狭い範囲でシーザーの亡霊がどのように扱われているかを *Caesar's Revenge* の紹介をかねて述べてみる。

II 「シーザーの復讐」の資料

(1) 作 者

作者不明。氏名に関する資料または推測可能な断片的資料も現存してない。

(2) 登録と出版

表題は *The Tragedy of Caesar and Pompey or Caesar's Revenge* となつている。登録は *Caesar's Revenge* として 1606年6月5日の日付で the Stationer's Company に、‘Entered for their Copies under the hands of Master Doctor Covell and the wardens A book called Julius Caesar's revenge.’ とある。copy は二部あって、第一の copy は四折版でローマン・タイプの印刷で紋章もある。その下に At London Imprinted by G. E. for

John Wright, and are to be sold at his shop at Christ-church Gate と出版者と印刷者名が記してある。第二の copy には紋章はなく、その位置に Privately acted by the Students of Trinity College in Oxford とかかれ、その下に Imprinted for Nathaniel Fosbrook and John Wright, and are to be sold in Paul Church yard at the sign of the Helmet としてある。さらに1607年から1615年までの年代がかかっている。したがって登録は the Stationer's Company の日付を認めるのが賢明である。登録とは別に創作年代を D. Wilson¹⁾ は1592年から96年頃と推測し、E. K. Chamber²⁾ も C. Crawford の説を引用して、1592年から66年説をとっている。登録と創作の間にいくらかのずれがあるらしい。出版年代も不明であるが、恐らく1606年の終り頃であろうと推定されている。

(3) 文 体

D. Wilson³⁾は Marlowe と Kyd の模倣としている。それは16世紀後半、主に1590年代の10年間位において一般的に人気のあった文体⁴⁾と酷似しているためであろう。さらに編者の W. W. Greg⁵⁾も第一、*Tamburlain, Spanish Tragedy* の模倣、第二、劇中に息拔きがない (the complete absence of comic relief)、第三、難解な古典的寓意が多いことをあげている。史実に照しあわせてはあるが、模倣の文体であるうえに劇的な起伏にとぼしいものといえる。

(4) 底 本

Shakespeare の *Julius Caesar* が Plutarch によっているので同様かと思われがちだが、一般的には Appian の *Bellum Civil* を底本にしていると考えられる。それは Plutarch にはない登場人物がいることによる。Bucolianus が Caesar の殺害者の一人としているのは Appian⁶⁾ の中である。Schanzer はさらに後半の Caesar の描写から「かなり Lucan と Muret-Grévin に負っている」⁷⁾と説明する。

(5) 上 演

上演記録なし。第二 copy に記載してある年代を確証するものはない。しかし出版数年前には劇内容から判断して上演されたように思われるが、恐らく一般の舞台にはかからなかったのであろう。

(6) 劇構成と登場人物

Senecan Practice⁸⁾ ともいえる構成である。5幕28場、2,570行で各幕にコーラスがおかれ、Discord がこの成行きを語る。*Julius Caesar* と比較してみると次のようになる。

Caesar's Revenge — その紹介とシーザーの亡霊 —

Caesar's Revenge

(5幕28場 2,570行)

1幕	6場	606行
2幕	5場	537行
3幕	8場	620行
4幕	4場	362行
5幕	5場	445行

Julius Caesar

(5幕 18場 2440行)

1幕	3場	564行
2幕	4場	503行
3幕	3場	609行
4幕	3場	410行
5幕	5場	354行

登場人物は The name of the Actors の中に記入もれ二名 (Trebonius, Lord) の外に綴りが一致しないことがある。

Discord

Titinnius	Cleopatra	Roman 1	Bucolian
Brutus	Achillas	Roman 2	Octavian
Pompey	Sempronius	Bonus Genius	Caesar's Ghost
Caesar	Cassius	Calphurnia	Cicero
Anthony	Cato Sen.	Augur	Cato Jun.
Dolobella	Casca	Precentor	Camber
Corne'ia		Senetors	

III 「シーザーの復讐」の梗概

Discord (デスコード) が最初に登場して「血と死をローマの陣大鼓が鳴り響かせ、ファルセイラスの地を血に染め墓場と化す」(II. 1-3) と嘆き、神々と人間が災いと呪いとで結ばれていることを恐れ、ローマがもろもろの悪に打勝つ力をえることを願う。Caesar (シーザー) との戦闘に敗れた Pompey (ポンペイ) と Titinnius (ティティニウス) 一党はローマの栄光、自由と共和制の崩潰 (II. 40-2) に涙を流しつつ逃げのびていく。その場にとどまつた Brutus (ブルータス) にシーザーは「真実に根ざした愛は決して憎悪に変ることはない」(True settled love can never be turned to hate. I. 209) と愛の不動性と自分への不信を嘆く。(1幕2場) Anthony (アントニー)、Dolobella (ドロベラ) らはシーザーの軍功をほめそやすが、そのような甘言など意にとめずポンペイ追跡を求める。一方 Cato (ケイトー) は、自由ローマの喪失に傷痕を心ふかくのこし、ポンペイは妻を残してエジプトに逃れ去る。やがてシーザーの軍隊はエジプトに遠征してくる。彼は Cleopatra (クレオパトラ) の美貌に魅せられその虜となってしまう。(1幕6場)

ローマの嘆き、苦悩、災いをデスコードが憂いて語る。トオリイミイ王と

の確約を信じてエジプトにのがれてきたポンペイを暗殺する密命をうけて、陰險な野望をもつ Sempronius(センプロニウス) と Achilles (アキラス) が密談にふける。夫のあとを追ってきた妻 Cornelia (コルネリヤ) はその反逆をしり、あまりの変化に悲しみ自害する。暗殺の報告をうけたシーザーは、この卑劣で尊大な行為に憤り、また悲嘆にくれ、胸を痛めてローマに戻る。(2幕3場) ローマの自由(Roman's liberty)の終熄に、自由を愛するブルータスやシーザーに敵意をいだく Casca (カスカ)、Cicero (キケロ)等はずれぞれに大きな危惧を抱く。Cato Junior (ケイトー・ジュニア)は、すでに自由はその命脈がつかたとして自害する。(2幕5場)

デスコードは第三幕で、シーザーの意気揚ようたる凱旋、元老院にポンペイのその席なきこと、復讐の女王アダストリアが目覚め呪いの大鼓を打たせ、ブルータスにシーザーをうちとらせる、そして悲劇的な硝煙の匂いがする、と語る。Cassius (カシアス)は心ひそかに暗殺を誓い、「カシアスは死せるポンペイの霊に誓う。カシアスは苦悩するローマに誓う。カシアスは天地もご照覧あれと誓う。」(ll. 1192-4) シーザーはローマに戻り、ここに世界制覇をなし、すべてを隷属せしめ、ローマ人がかつてなし遂げえない程の勝利と栄光をローマにもたらした、と公言する。しかしアントニーはこの勝利の宣言を冷やかにうけとめる。そこへアントニーの Bonus Genius (善霊)が現われる(同一人物の二面性を具象的な形で表現しているものと考えられる)。善霊はアントニーに、名声を無駄にさせることはないこと、またフィリパイでは大いなる偉業と勝利を手中に納めると予言して消える。(3幕3場) ブルータスは、自己と勇気、ローマへの愛と情熱、何もかも減びてしまったと悲しむ。カシアス、カスカ、Trebonius (トレボニウス)、Camber (キャンバー)達と、愛するローマと自由なるローマのためにシーザー暗殺を約束する。一方シーザーは、多くの人々の数度の懇請にもかかわらず、私はシーザーでありたいといって王冠受理を拒絶する。(3幕6場)元老院登院の当日、妻 Calphurnia (カルファニヤ)が不吉な予感に危惧をもち、夫シーザーの登院をやめさせようと努める。しかしシーザーは暗殺の誓言者名記載の紙片を渡されても一笑にふして元老院へ向う。議場で突然の叫びのうちに、カシアス、Bucolian (ブコリアン)そしてキャンバーと続きシーザーを刺す。シーザーは、ブルータスを見て悲痛のうちに、

What Brutus too? Nay nay, then let me die,
Nothing wounds deeper than ingratitude.

(II. 1727-8)

おお、ブルータス、お前も。いや、それなら死なせてくれ、
忘恩ほど心の痛手を深めるものはない。

と叫ぶが、ブルータスはローマの邪悪にひとつきとばかりシーザーを刺す。
(3幕8場)

ブルータスが長いこと希求したローマの自由をえたが、ローマの勝利も誇りも墳墓と化し、この世の征服者達は自分の刃でおのが墓を掘ることになる(II. 1767-1788)、とデスコードが独白する。ふたたびシーザーの声をきくことはできないと Octavian (オクタビアン) は悲しみにくれる。柩を中心に弔問者とアントニーは、シーザーを讃美し、忘恩の徒を激しく責める。そして復讐へとかりたたされる。ブルータスとカシアスが現れたところへ、「アントニーに煽動された市民達が「復讐」と叫んでいる」と、ティティニアスがしらせにくる。兵を整えてから再会といって二人は別れる。(4幕3場) シーザーの亡霊が現われて44行の独白をする。「23カ所にわたってうけた傷は大戦によっても癒されることはない。呪いによる復讐あるのみ (my just revenge)」(II. 1974-2018) と語る。そしてアントニーとオクタビアンが勇ましく敵陣へ進もうとしているところへ現われる。「戦いをやめて、恐怖を歓喜に、そして戦争を平穏無事な平和にかえなさい」(let battle cease, Change fear to joy, and war to smooth-faced Peace) (II. 2085-6) と呼びかけ、刃を納めることこそブルータスに強い打撃を与えるに違いない、と諭す。しかし二人はこのような言葉に耳を傾むけることをしない。(4幕4場)

デスコード登場。平原には戦車と、鎧かぶとに楯、そして恐怖と亡者達がローマ軍をおびやかしていると現状の説明をする。カシアス、ブルータス、ティティニアス、ケイトー達が軍をひきつけて会合し、今までの戦況を語りあう。戦いは一進一退、ついに戦雲はブルータス軍に不利のきざしを見せ始める。ブルータスが過去のできごと、現在、未来について一人煩悶しているところへ、シーザーの亡霊が現われる。23カ所の傷の痛手と、ブルータスの忘恩による傷心の深いことを話し、彼を苦しませる。苦悩と絶望に破滅し、自ら命を絶てとせまる。(5幕1場) ローマ軍にとって戦況はますます憂色濃いものとなり、ケイトーは負傷のち自害する。カシアスは、フィリッパイの地が不幸な墓場と化すことをしる。そして前の会戦で戦死しなかったことを自嘲し、ブルータスのあとを追うとして自害する。ブルータスはたえず自分のあとを追う亡霊に、何故このような苦悩をあたえるのかと詰問し、こ

の肉を引裂けと絶叫するほどに悶える。デスコード入場し、すべて亡霊の望み通りとなり、地上は屍の山、血の海となったことをつける。シーザーの亡霊は「古代の勇士と黄金時代の英雄達と、おわりなき日々をつきせぬ歡喜のうちにごさう」(ll. 2568-70)と語って、この劇は終る。

IV シーザーの亡霊

(1) 復讐と亡霊

エリザベス朝時代、とくに初期の劇における「復讐」の主題には、亡霊が劇的要素として劇と同次的に扱われている。亡霊、仮に喜劇に現われるとしたら、その亡霊はそれ自体で興味的娯楽的な雰囲気をかもしだすであろう。悲劇や復讐劇においては、陰惨で、現実の中での超自然的なものを感じさせる。悲劇に亡霊の理念がどのように、またなぜ復讐には亡霊が出現するようになったのであろうか。最初の英国悲劇といわれている *Gorboduc* は Seneca 流の方式を明確に適合させたものといわれる。ヨーロッパの悲劇は、一般的には幸運の逆転による失意、絶望を扱っているので、Seneca のそれとは同じに受けとれない。

Tamberlain the Great と *The Spanish Tragedy* で代表される Christoph Marlowe と Thomas Kyd の作法は、当時の先端をいくものであったので「シーザーの復讐」の作者がその影響を大きくうけたのは当然と考えても不思議はないと思う。Kyd の「スペインの悲劇」にもられている「復讐、亡霊、コーラス、哲学的思索、内省、修辭的対句と反復」⁹⁾はまったく Seneca 的である。「シーザーの復讐」の全容、またはシーザーのみを拡大してみてもこの種の範囲から一步も出ていない。したがって Kyd の影響を全面的にうけ、その模倣に終始していることは否定できない。また Kyd の死者の亡霊と復讐精神はこれまた Seneca 的作法である。Seneca 式の亡霊について P. Simpson は、'A Senecan ghost, who is a passive but restless spectator of the action; the murder; ... and the clean sweep in the final vengeance which involves the innocent as well as the guilty.' (セネカ式亡霊、それは動き、殺害等の受動的だが積極性のある第三者であり、また罪悪行為はむろんのこと悪意のないことをも含めて最終目的の復讐を遂行するもの)と説明している。悲劇でのこの種の亡霊が、エリザベス朝劇において絶体的支配をおさめていたわけではないが、初期においては劇的效果をも意図されて、この亡霊が復讐と強く結びつけられもした。¹⁰⁾ それは特殊な舞台、劇的效果を

観客に与えるものであり、悲劇の場面構成としての役割は大きいものである。「シーザーの復讐」のシーザーの亡霊も劇内容、舞台効果いづれにも重要な役割を担っている。それが復讐と結びつくことでさらに残忍で凄愴な雰囲気をかもしださせている。

亡霊はかならずしも悲劇や復讐劇の報復主題としてのみ扱われるものではなく、復讐を叫び凶事の前兆を予言するためにも現われることがある。¹¹⁾ 活発な行動性はないが、たえず主役または敵対者に対して主観、客観的意識として内在させる重要な存在物としてその位置をしめることもある。主として亡霊は、殺人、残忍な行為、あらゆる苦悩と可能な限りの崩壊を相手に導びかせることによって、報復手段の実現とみる。しかし亡霊みずから手を下し、血で自分の手を汚すことは決してしない。Shakespeare は亡霊に肉体的また物質的に活動する力を与えていない。ハムレットの父王の亡霊は、ハムレットに復讐することを求めることはしても、そしてそれがハムレットの心の葛藤や苦悩の原因とさえなっても、亡霊自身復讐の行為者にはならない。バンクオーの亡霊はマクベスと観客以外には無の存在であり、マクベスの自意識の奥深く内在するものとなる。劇中に亡霊が現われて、ある種の性格を有し一つの役割を演ずることは、すでに当時一般的であった Seneca の影響を意識的または無意識のうちにとりいれた結果であろう。しかし、いづれも復讐を意図し具体的実現を求める亡霊ではあっても Seneca 式そのものではない。*Julius Caesar* のシーザーの亡霊と異なり、Shakespeare 独自の形——それは亡霊が出発点¹²⁾ となっていることからして考えられる。「シーザーの復讐」では Seneca—Kyd の伝統に基づく復讐理念の完成とそのための亡霊が出現する。死が分岐点となって、一人物の生前と死後の対照的存在を示す、がそこには分離を感じさせるものはない。不適当な死ゆえに、生前の栄誉を回復する目的のための復讐は、死後亡霊が自らおこなう。したがって亡霊は復讐しなければならないものであって、正に復讐する亡霊以外の何者でもない。

(2) シーザーとその亡霊

ジュリアス・シーザーは古今東西、実によく利用され、そのうえ彼を主題、副題にとりあげて多くの劇がかかれてきた。*Julius Caesar* が Plutarch の史的典拠（エリザベス朝時代の人々が尊敬する権威¹³⁾）をもとにかかれているのを始めとし、多くの作品がそれに準拠している。Shakespeare 始め同時代

の作家に伝統的慣習を含めて各種の影響を与えているわけである。「シーザーの復讐」には Kyd に引継がれ開花した Seneca 流の「復讐する亡霊」がみられるのは、その影響の度合をしるうえに興味がある。このシーザーの亡霊と生前のシーザーとは同じ性格をもつ存在ではない。压制者、自由を叫ぶ市民を強圧する独裁者のシーザーではなく、正義に燃え、ローマをこのうえなく愛する愛情豊かな軍人——それが生前のシーザーの姿であった。ポンペイの暗殺を聞いて、心から慨嘆し、暗殺者を呪う武将である。戦場で雌雄を決することこそ彼の望むところであり、卑劣な手段を少しも喜ばない。彼は好敵手のポンペイを讃え、その死を惜む。

The princely virtues and thy noble mind,
Move me to rue thy undeserved death, (ll. 808-9)

気高き徳、高貴なるみ心ゆえ
思わざる死を悔いる

ブルータスとは立場が異なるけれど、自由なるローマを求め、王冠を戴くことを毅然と拒む。「野望にみちる征服者、压制者」と敵対者が呼称する人物像とはまったく異質の人物とすら感じるほどである。シーザーは、世界制覇を遂行したにすぎず、決してローマの征服者ではないを強調し、一介のシーザーに留まることが彼の念願ですらあるという。

Content you Lords for I will be no king,
An odious name unto the Roman ear,
Caesar I am, and will be Caesar still,
No other title shall my fortunes grace: (ll. 1504-7)

王にはならぬゆえご満足いただきたい
それはローマ人にはいみぎらう名称です。

シーザーは私であり、かわることなくシーザーでありましょう。

他のいかなる呼称も私の榮譽に光を添えることはない。

ここに現われているシーザーは英雄であって、野望家ではない。強大な力を背景にしてはいるものの、独裁を求めようとはしない、比較的自由的な武将とでもいえようか。反対党に属し、暗殺計画すら肯定しているケケロは、彼の本性は決して恐るべきものではないと示唆している。

Caesar although of high aspiring thoughts,
And uncontrolled ambitious Majesty,
Yet is of Nature fair and courteous. (ll. 1028-30)

シーザーは、高い望を抱いた思いと
抑えきれぬ野心をもつお方だが
生来、公正で礼儀正しいのです。

暗殺後、シーザーに与えられた市民達の言葉は、死者への単なる饞けのようなものではない。悲しみのうちにも彼の存命中の偉大さを讃美する響きは、ローマを圧するほど大きいものであった。一般市民の英雄評価というものは、為政者のいわゆる慈愛心とか、財産分与的な行為が伴えば非常に高いものとなるのであろうか。世界を治め、ローマの国威を高揚した英雄シーザーに対して、ブルータスその他少数の人々以外の市民達は何の危惧も感じていない。自由を求めるローマ人が、自由の迫害者であるとされて暗殺されたシーザーを、心から讃えるものが群をなして集る。

Thou whilst thou livedst wast fair virtue's flower
Crowned with eternal honour and renown.
To thee being dead, *Flora* both crownes and flowers,
(The chiefest virtues of our mother earth.)
Doth give to gratulate thy noble hearse. (ll. 1841-5)

御存命中、あなたはとわに変わらぬ榮譽と名声に
飾られし、いと美しき徳なる花でした。
死せるあなたに、花の女神フローラが、花冠と花々を
(母なる大地の最善の徳を)

気高き柩を迎えるべく贈られます。

生前一暗殺時までのシーザーは、武勇を誇示せず柔和とまでいえる武将であった。ローマを愛する、善行なる人でもあった、と表わされている。生前一暗殺一死後、暗殺を境いに彼はまったく対照的なイメージ¹⁰を観客、読者に与える。それは、生前の善霊と死後の悪霊 (good spirit-evil spirit) 的感覚が、正反対であると同時に対照法としての人物投影をももたらしめているからである。「復讐する亡霊」となったの出現は、デスオーダーによって黄泉の国からの魅りであることが暗示される。

Thus from thine ashes *Caesar* doth arise
As from *Medea* hapless scattered teeth: (ll. 1782-3)

かように、死灰からシーザーは甦る
不幸にも四散した威力がミーデイヤから甦るように。

この死者の復活は、キリストの復活とはまったく異質である。黄泉の国から

の復活は何を意味するのであろうか。死因がその人物に相応しくないとき、復讐することにおいて救れるという思想がいく分かでもあったのではないだろうか。演劇の伝統と慣習ということのみで判断するのは早計とも考えられないだろうか。シーザーは、連戦連勝、かつてのアレクサンダー大王軍を想起させるほどの勝利に満ちた凱旋後に、

Now servile *Pharthis* proud in *Roman* spoil
Shall pay her ransom into *Caesar's* Ghost:
Which unrevenged roves by the Stygian strand,
Exclaiming on our sluggish reglignce.

(ll. 1431-4)

ローマの戦利品におごれる卑しきファルシヤには
おのが身代金をシーザーの霊に納めさせよう。
その霊は復讐もせず、三途のふちを、
わがものぐさな等閑をなじりながらさまよう。

と語る。死後でも報復を求めない（といっても、復讐する意図はあるのだが）黄泉の世界が存在することを示唆しているのではないだろうか。しかしこれは復讐する世界との対比を念頭においた言葉であろうし、復讐する霊の存在を表わしているともいえよう。「ジュリアス・シーザー」でアントニーが名演舌をする前に、シーザーの屍に跪いて語る言葉の中に、地獄から出現する霊的なものについて語っている。

And *Caesar's* spirit ranging for revenge,
With *Até* by his side come hot from hell,
Shall in these confines with a monarch's voice
Cry 'Havoc' and let slip the dogs of war;

(*Julius Caesar*, III, i, 271-4)

復讐にもえるシーザーの霊が
アテの女神をともない、地獄から現れ
このあたりで、大音声に
号令を下し、戦場と化すであろう。

Shakespeare も同時代の作者と同程度ではないとしても、ある程度まで復讐神 *Até* の存在を認めていたのではないだろうか。シーザーが復讐する亡霊として出現し、人間に苦悩を、この世に惨禍をもたらすことをアントニーに予言させている。

復讐するシーザーの亡霊は、自から考え行動する a shadow art (l. 2010)

である。そして不幸な死業であるため、苦悩と怨霊の声が満ちあふれ、偶像と亡霊とゴルコンの住む陰うつな地獄に追いやられて、そこから出現してきたのである。暗殺死を境に、シーザーの変化は「肉のシーザー」から「霊のシーザー」になったといえる。「自分の死が、一つの贈りもの、正当なる復讐を求めている」(l. 2052)と復讐心にもえるシーザーは、自分以外の人間に行動されることを忌み嫌う。オクタビヤンとアントニーが軍をひきつけて、ブルータス一党に復讐戦をいどむことを心よく思わない。そればかりか、彼等に甲合戦の停止を望むほどである。戦いによって、報復相手を壊滅させるのではなく、一步一步近づく死よりも恐い苦痛と足掻きで悶え苦しみ自滅させることであった。ブルータスは「どんないまわしい怨霊が、私の心をいらだたせるのか」(l. 2271)と、短剣がシーザーの心臓を刺して以来、心中少しも穏やかな日を感じずることはなかった。「忘恩」と叫べられたあの瞬間から、彼の理論と感情の間に、行為の正当性を確信するというより、行為にともなうある種の後悔が隙間風のようにつめたく入りこんだ。彼の面前に現われたシーザーの亡霊に、火の川、黄泉の国からくる怨霊で自分の命を絶つことをもとめる。しかしシーザーの亡霊は、

And for my wrong and undeserved death
The life to thee a torture shall become. (ll. 2306-7)

不当で相応しくない私の死の報いとして、
おのれの生命はおのれにとって責苦となろう。

と、ますます苦しませる。ここにみられる亡霊は、実行力をともなわないが総体的に行動的である。復讐するその姿に、ある種の人格的要素をみることが出来る。しかし、伝統的慣習を踏襲している本劇のシーザーは、自から手を血に染めて復讐を達成することはない。「血にうえている怨霊」(the furies thirsting for the blood) (l. 2302) が地獄で待っていることを責め道具として利用する。自分で命を絶てとせまるシーザーの亡霊に、ブルータスはこのような責苦、苦痛の不当をなじり、ついに、

Boil me or burn, tear my hateful flesh,
Devour, consume, pull, pinch, plague, pain this heart,
(l. 2515-6)

煮るか焼いてくれ、このいまわしい肉体をひき裂いてくれ、
この心をむさぼり、やつれさせ、引き裂き、痛ませ、悩ましそして
苦しめてくれ。

と叫び、この苦しみを土産にし地獄におのが喜びを響かせろと苦悶しながら絶叫する。復讐する者の執念が、復讐される者へ着実につたわっていくようである。

E. Schanzer は、Shakespeare のシーザーは敵対者によって暗殺されることにより、「束縛から自由とされ、肉体と精神は分離された」¹⁰⁾と説明する。事実、body of Caesar と spirit of Caesar は、「シーザーの復讐」におけるシーザーの同一体的存在とは異なっている。死後の霊は生前のそれとは同一でなくなっている。「ジュリアス・シーザー」では、シーザーは超時間性的に変化されている。ブルータスやカシヤス達にとつては、3月15日から始まった苦悩の連続であり、忘れえぬ存在ですらあった。ブルータスの陣幕にシーザーの亡霊が現われてはいるものの、それは苦悶する者の良心の呵責から発する妖気のようなものですらある。すべてがシーザーの呪詛や、復讐するシーザーの亡霊の影響というより、ブルータスの恐怖感にとらわれた心的形象、主観的要素を強く感じる。

O Julius Caesar, thou art mighty yet!

The spirit walks abroad, and turns our swords

In our own proper entails. (Julius Caesar, V, iii, 94-6)

おお、ジュリアス・シーザー、あなたははまだ力強い。

あなたの亡霊がさまよい、われわれ自身の刃で

おのがはらわたを貫ぬかせる。

終局的には、ブルータスは「シーザーの復讐」と同様「ジュリアス・シーザー」でも自害してはてる。しかし、その過程はまったく同一ではない。シーザーの亡霊は、二つの劇においてまったく異質なもので相対的、対立的内容をみせている。「シーザーの復讐」では単なる伝統模倣で創造性のない画一的な状態と考えられる。

復讐を遂げることは、身分不相応な死業のため奈落へ没したためであり、名誉回復の手段でもある。これには地獄に相対する極楽の存在を意味していることに気づく。地獄での責苦から解放され、そこからの脱出を行うには、自分を不正な手段で死においやった裏切者や敵対者を呪いそして報復すること以外には許されない事情がある。戦いに敗れ四散するとき、妻コーネリヤに別離をいうポンペイの心中にも、極楽浄土に住むことの夢を語るころがある。

If that I die, yet will it glad my soul,

Which then shall feed on those *Elysian* joyes, (ll. 443-4)

たとえ私がこの世を去っても、極楽浄土の歓喜に
生きながらえるわが霊をよるこぼせるであろう。

報復の神 Tysiphone も血で脹れるほどに、地上は惨禍をうけ、死体の山、
血の海となることによって、「復讐するシーザーの亡霊」は安堵と充足感を
味う。

I will descend to mine eternal home,
Where everlastingly my quiet soul,
The sweet *Elysium* pleasure shall enjoy,
And walk those fragrant flowery fields at rest: (ll. 2557-60)

永遠に変わぬ館に身をおろそう、
そこで、わが平穏なる霊が、つきることなく
快い極楽の歓喜を享受し
あの芳香な花園を、やすんじて散策しよう。

このようにして、シーザーは古代の勇士と黄金時代の英雄と共に日日を無窮
の喜びのうちにすごせることになる。地獄から極楽への質的变化を示したも
のである。この種のことについて、Shakespeare はまったく一顧をもあたえ
てない。「シーザーの復讐」や「ジュリアス・シーザー」で、裏切者や暗殺
者を震駭させ自責の念にからせ、苦悩の深淵につきおとさせることができる
ものは、神や運命の力ではなかった。亡霊が人間を呪い、害を加え自滅させる。
そのことをする限りにおいては「復讐する亡霊」であることに間違いない。
しかし質的相異が地獄（身分不相応な死による結果）—極楽（復讐すること
により地獄からの解放）という過程を求めることによって一層明確化する。

V おわりに

演劇での realism は現実生活の realism ではない。誇張があり、ときには
非現実的なものですらある。劇にはそれなりの効果が必要である。エリザベ
ス朝劇の初期に、「復讐」と「亡霊」の関係は演劇伝統と相俟って、一種の
現実感のような効果を観客に与えたのではないかと考える。「シーザーの復
讐」のシーザーの亡霊に次の三つに亘る意義を見出す。

第一に、地獄からの出現であり「復讐する亡霊」である。「シーザーの復
讐」では、生存中の身分に不相応な死業のため苦悩にうごめく地獄におち、
そこからの脱出は復讐することのみにあった。「ジュリアス・シーザー」で

は、現世を破壊するために復讐神 Até をたずさえて現われてきた。表面的には共通性があるが、地獄からの自己解放と心理的出現とでは質的相違がある。

第二に、シーザーの二面性である。「シーザーの復讐」においては、暗殺によって質的变化が行なわれ、Lucan や Muret-Grévin の方法に則って、対照法的人物投影が行なわれている。これは別個の存在物としてではなく、同一体を意味する。Shakespeare は「復讐する亡霊」の伝統的慣習をうけいれてはいるが、その存在物は暗殺以前と以後ではまったく断絶がみられる。肉体と精神の分離であり、the death of Caesar と the revenge of Caesar¹⁹⁾ の区別であると考えられることもできる。

最後に、「復讐する亡霊」は、その源泉として生前の行為と関連している。身分相応の死であればこの種の状態の起因とはならない。裏切り、敵対者などによる暗殺死、それに類する非業な死は不相応の死となる。この場合、生前の地位、栄誉とは関係なく地獄におち、仏教と類似した三途の川や火の川で黄苦にあうことになる。そこからの脱出と生前の名誉回復のための復讐、したがって「復讐する亡霊」こそ自己保全を徹底的に自己のみで、他人の力を借りることなしにする一様相ともいえる。このような思想、行為は、生一死を超越して考えると、そこにはより現実的意義を見出すことすらできる。「シーザーの復讐」ではこの思想をうけつぎ、シーザーが復讐をとげたその時点で、極楽浄土へいける有資格者となった。「復讐」「二面性」「地獄—極楽」等、シーザーの生前（親しまれる英雄）と死後（恐れられる亡霊）は、当時の演劇伝統、慣習にさからうものではない。むしろ、模倣性の強いことを感じるほどである。しかし、生前の名誉回復のために、亡霊が消極的にせよ行動性をもち、復讐という凄惨ともいえる方法ではあるがその努力をするところに、作者の何か意図するものが隠されているのではないだろうか。「極楽」というような考えで、例えどのような表現方法や型であらわされようとも、キリスト教を信仰対象としている当時の人々が土着信仰を体験的に内部に秘めながら、キリスト教における生と死という問題をどのようにとらえていたかである。また、当時の観客の文化、伝統、思想、哲学等々などどのような形で結びつけることができるものであろうか。地獄 Hades、三途の川 Styx、極楽 Elysium は単なるギリシャ神話からくる発想であり、演劇的伝統にすぎないものとうけとめていたのであろうか。劇である事実がとりあげられているときに、演劇技術の一種にすぎないとか、慣習、伝承、模倣であると安易に断定してよいものであろうか。観客に訴える何かがあって、ある種の共感を

呼び起すとすれば、観客自身にそれをうけ入れるだけの共通の質的要素が内在しているものと思われる。それを否定するものが現われてきたときに、Seneca 的な「復讐する亡霊」の存在価値がうすれ形骸化していくのであろう。二種類の亡霊を対照して、「シーザーの復讐」のシーザーは、思想の肯定と忠実な伝統技術のシーザーの亡霊そのものであり、Seneca 的余韻をもつとはいえ Shakespeare のシーザーとは対立したものである。シーザーの亡霊の第三の背景から容易に想像することができる。Shakespeare 自身、僅少にしる伝統的慣習をうけるのは当然であるが、思想まで左右されることはなかった。彼の才能がそれを打破し、超越したところに同時代の作家の及ばない面が如実に現われたゆえんであろう。

注

(1) Dover Wilson (ed.): *Julius Caesar* (Cambridge University Press), 1964, p. xxvi.

(2) E. K. Chamber: *The Elizabethan Stage*, Vol. IV (Oxford, at the Clarendon Press), 1961, pp. 4-5.

(3) D. Wilson: *op. cit.*, p. xxvi.

(4) Ernest Schanzer: *The Problem Plays of Shakespeare* (Routledge & Kegan Paul, London), 1963, p. 20.

(5) W. W. Greg (ed): *Caesar's Revenge* (The Malone Society Reprints 1911), p. vi.

(6) *Appian's Roman History. The Civil War*, Book II Chapter 113, 117. Bucolianus について次のようにかかっている。“Of their own friends they inveigled two brothers, Caecilius and Bucolianus,…” (113) “Cassius wounded him in the face, Brutus smote him in the thigh, and Bucolianus in the back.” (117) *Caesar's Revenge*では Cassiusに次いで二番手としてかかっている。

Bucolian sends thee this. Stab him.

(III, viii, ll. 1701)

(7) E. Schanzer: *op. cit.*, p. 21.

(8) Ashley Thorndike (ed.): *The Minor Elizabethan Drama* Vol. I, Everyman's Library No. 491 (Dutton, New York), 1964, p. vi.

Thorndike は Senecan Practice として次の5つをあげる。1. the long (declamation) (長い修辭的な弁説) 2. the chorus (コーラス) 3. the division into five acts (5幕構成) 4. the messengers (先ぶれ) 5. the narrative of events (成行き) 等の叙述) 等である。

(9) A. Thorndike: *ibid.*, p. viii.

Helen Morris: *Elizabethan Literature* (Oxford University Press), 1958, p. 173.

彼は an avenging ghost (報復する亡霊) と説明する。本劇のシーザーの亡霊も同種である。

(10) M. C. Bradbrook: *Themes and Convention of Elizabethan Tragedy*

Caesar's Revenge —その紹介とシーザーの亡霊—

(Cambridge at The University Press), 1966, p. 18.

(11) Fredson Bowers: *Elizabethan Revenge Tragedy* (Princeton University Press, Princeton), 1966, p. 64.

(12) Percy Simpson: *Studies in Elizabethan Drama* (Oxford at The Clarendon Press), 1955, p. 150.

(13) Harold S. Wilson: *On the Design of Shakespearian Tragedy* (University of Toronto Press), 1958, p. 88.

(14) E. Schanzer: *op. cit.*, p. 18.

(15) E. Schanzer: *ibid.*, p. 34.

(16) P. Simpson: *op. cit.*, p. 144-5.

H. S. Wilson: *op. cit.*, p. 215.

gentle, peaceful, kind and life-giving. In the latter part, nature is compared to that of Basho's Haiku poems and some remarkable resemblances are seen in terms of their techniques of the Haikus' and Zen influences.

Caesar's Revenge

—Its Summary and Julius Caesar's Ghost—

Shozo TAKAHASHI

There have been many dramas of the Julius Caesar's story. An anonymous play, *The Tragedy of Caesar and Pompey or Caesar's Revenge* registered in 1606, is one of them. This play, which seems to originate not in Plutarch but rather in Appian's *Bellum Civil*, is regarded as an imitation of Malowe's and Kyd's traditional way of drama. Moreover, it is influenced by Lucan and Maret-Grévin tradition, which shows the effect by the contrast and projection of one character, Julius Caesar.

Julius Caesar's ghost in *Julius Caesar* and that in this play presents comparatively different aspects. Though these two ghosts both originate in the traditional custom of contemporary tragedy, their thought and action are quite different. Caesar and Caesar's ghost of this play have three points: one, the great contrast shown between his life and the time after his death; two, an avenging ghost of the traditional Senecan way; three, the thought of Hades and Elysium. These draw a definite line between the Caesar's ghost in *Julius Caesar* and the one in *Caesar's Revenge*. And these differences convince us that *Caesar's Revenge* is a rather poor and traditional imitation play of Elizabethan tragedy.

Some Implications of Psycholinguistics for the
Teaching of English As a Foreign Language:
Relating to Language Acquisition

Kohei FUNATSU

Since psycholinguistics is the joint investigation of language by